

| | |
|------------------|---|
| Title | ヴィジョンなきところ、その民は滅びる：日本国憲法施行五〇年目に |
| Author(s) | 大木, 英夫 |
| Citation | キリスト教と諸学：論集, Volume11, 1997.10：51-56 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3193 |
| Rights | |

SERVE

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ヴィジョンなきところ、その民は滅びる

—日本国憲法施行五〇年目に—

大木 英夫

旧約聖書の箴言二九章一八節に「預言がなければ民はわがままにふるまう」という言葉があります。欽定訳或いはキング・ジェイムズ訳と言われた一七世紀初頭の英語訳聖書では、*Where there is no vision, the people perish.* という言葉であります。これは古来英語世界においては大きな影響力をもった言葉でした。ヴィジョンという言葉は、日本語に訳せないためか、一般にそのまま用いられています。最近の訳では「幻」という訳語があてられています。それよりは、この「預言」という方がましでしょう。今日の日本に流行するのは「閉塞感」という言葉であります。それはノー・ヴィジョンの状態であります。

国家だけでなく、大学も、ヴィジョンがなければ滅びるのではないのでしょうか。「やる気」をなくした学生ほど困るものはありません。辞書によれば、「やる気」とは「物事を積極的に進めようとする目的意識」であります。その目的意識はヴィジョンによって引き出されてくるのであります。ヴィジョンとは目的的な「幻」「預言」であります。

一九九七年の初頭、この一年が一九九七年として規定されたことから考えて見たいと思います。それはキリスト教

的な歴史の捉え方があります。あと三年で紀元二〇〇〇年になります。たしかにその時点を見捨てることもできないわけではありません。茫漠たる大洋に、赤道という赤い線があるわけではないし、日付変更線という線が引かれているわけではない、そのように滔々たる時間の流れに紀元二〇〇〇年という区切りの年が来るということも、無視しようと思えば無視することもできます。しかし、それはやる気のない学生が時間を無視して講義に遅れてくるようなもので、「預言がなければ民は、わがままにふるまう」というような状態になるのであります。あと三年で紀元二〇〇〇年だということは、理論のカテゴリというよりは、預言のカテゴリに属するというべきであります。そのようなものとしてそれはたしかにキリスト教的な時間の意識なのであります。

二一世紀ということが言われる、それもキリスト教的な歴史意識でありましょう。世界史を一〇〇〇年単位で捉えるのもまたキリスト教的な歴史意識なのであります。千という数字はラテン語でミレニウムであります。ここでは英語風にミレニアムと発音しておきます。ペテロの第二の手紙第三章八節に「愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあつては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」という言葉があります。この言葉によれば、昨日を振り返ることは、過去二四時間ではない、過ぎ去った一九九六年という三六五日ではない、それは過去千年であるということ、そして明日を語ることに、それは向こう千年を展望することなのであります。千年、ミレニアムというのは、インド的億兆年と違って、もし人生一〇〇年とすればその一〇倍、また実際に文化形成には何世紀もかかることを思えば、人間として現実に捉えることのできる最大限であります。紀元二〇〇〇年まであと三年という今年、もし振り返って見るならば、それは紀元一〇〇〇年からの千年が終わりを迎えることになります。最初の一〇〇〇年を第一ミレニアムと呼ぶならば、次の一〇〇〇年は第二ミレニアム、そして来る紀元二〇〇〇年からは第三ミレニアムとなるわけがあります。世界史を千年単位で区分するということは、世界史を把握するためであり、また

ヴィジョンをもつためであります。

ここで、ミレニアムの二つの捉え方を見てみたいと思います。上に述べたのは、まさにクロノロジカルな見方です。もうひとつはエーポカル、エーポック・メイキングなエーポカルな見方です。エーポカルな見方の典型は、フィオーレのヨアキムの思想であります。彼は三位一体論を歴史のエーポックに適用しました。父なる神の時代、子なる神（キリスト）の時代、そして聖霊なる神の時代としました。そこで興味深いことは、来るべき時代は、先駆的にその前の時代の中に、既に開始しているという見方です。この見方を近代において典型的に示したのはマルクス主義の歴史観でした。来るべき社会主義の時代は、資本主義の時代の中に始まっているという見方です。エーポカルな見方とクロノロジカルな見方とは、ずれることはあっても分離はできません。このエーポカルな見方は、世界史の中の教会の歴史に関わるものであります。教会は使徒時代に開始しました。それから約三〇〇年は、ローマ帝国の迫害のもとにありました。しかし三二三年のコンスタンチヌス大帝のミラノ勅令によるキリスト教公認は、教会の運命を一転します。新しい首都コンスタンチノーブルが建てられました。教会は公会議を開いて統一を作り上げます。しかし、ローマ帝国の東西分割と共に、教会も東西に分裂します。西ローマ帝国は蛮族の侵入によって滅亡、東ローマ帝国は古代ギリシャ文化のキリスト教的継承者としての東方オルソドクス教会によってビザンチン文化を生み出すのであります。しかし、その東ローマ帝国は、一四五三年のコンスタンチノポリスの陥落によって滅亡します。もしこれを教会史における、「第一ミレニアム」と見るならば、「第二ミレニアム」は、八〇〇年のシャルルマーニュのローマ教皇による戴冠から始まり、カロリング文化を生み出し、そして神聖ローマ帝国としてコルプス・クリスチアナムの形成という偉大な教会支配体制を確立します。それはナポレオンによる神聖ローマ帝国の滅亡をもって区切られます。「第三ミレニアム」は、一五一七年の宗教改革に起点をもちますが、一七世紀のイギリス革命

(一六四二年のピューリタン革命と一六八九年の名誉革命)を経て一七七六年のアメリカ革命に至り、アメリカ合衆国憲法修正第一条はコルプス・クリスチアヌムの原理のまきに対極にある「教会と国家の分離」の原則を確立したのであります。宗教改革以後徐々に動きだした社会変動の源流は、モダナイゼーションとなって世界史に姿をあらわし、二〇世紀には世界戦争を経て激化し、日本は敗戦によってその変化を日本国憲法制定として国家的に受け止めたのであります。今年はその施行五〇周年となります。

これまでの世界史を振り返れば、教会史的第一ミレニアムはギリシャ正教会(東方オルソドクス教会)の時代、第二ミレニアムはローマ・カトリック教会の時代、転じて前方を眺めるならば、あらゆる徴候から、第三ミレニアムはプロテスタンティズムがそれを担わなければならないのであります。というのは、今日世界に急速に広がりがつつある人権や自由、またトレレーションという近代憲法の基本原則は、ピューリタン革命からアメリカ革命への過程の中で成立し、中世のコルプス・クリスチアヌムとは対蹠的方向に向かう社会変動を突き動かしてきたからであります。かつてリンゼイが「自由、平等、兄弟愛という理念は、もし宗教的基盤を離れるならば、浅薄なものとなり論駁され易いものとなる」と言いましたが、もしこの洞察の正しさを認識する人ならば、第三ミレニアムはプロテスタンティズムが出番となるということをも理解するであろうと思っております。

この正月、わたしはNHKの特別番組を見ました。国谷さんと堺屋太一氏が、アメリカ、香港、マレーシアの評論家たちをゲストとして迎え、香港返還を主要テーマとした議論でした。その最後に日本の将来を三人のゲストから聞くのですが、まず、日本が自分自身を他者から聞かないと分からないということがいかにもヴィジョン喪失的であります。日本は日本国憲法によって基礎構造を決定されているのであります。その基礎から考えるしかないし、またそうすべきなのであります。それは、上にのべたプロテスタント的文化原理、自由とか人権とか、教会と国家の分離、

トレーションという基本理念を継承しているのであります。それは日本の戦後を規定してきたのであり、これまでの発展の基礎でありました。それだけではない、この憲法が既に第三ミレニアムに向かう日本の基本姿勢を決定しているのであります。ネイスビッツというアメリカの未来学者は、その問いに答えて、日本はG7から脱退せよ、それはアジアの一員となることへの象徴的意義があると言っているのであります。しかしそれは日本は要するにお金のことしか考えない、経済発展のアジアにもどってお金を儲けるのがよいというように聞こえるのであります。さらに日本は所詮西欧の一員になれないという拒絶をも感じさせられるのであります。彼の議論には矛盾があり、他方で世界経済のグローバリゼーションを言い、日本の官僚を批判しながら、日本は規制緩和を進めて、それに合うような体制を造れとも言っているのであります。香港の評論家は、いや日本はG7に留まるべきだ、そして欧米とアジアの架け橋になるべきだと反論しました。これに対して堺屋氏は、日本は明治以来脱亜入欧で、アジアに背を向けてきた、もっとアジアに目を向け、欧米的考え方とアジア的なものとの両立できるような体制をとる必要があるといっているのであります。これは今日の日本の行くべき道を示すというよりは、むしろ閉塞感の中での日本の知性のヴィジョン喪失を代表するような発言でした。グローバリゼーションとは、時間の相における〈モダナイゼーション〉に対応する今日の社会変動の空間的相貌であります。グローバリゼーションとは、今までは東洋と西洋とか地域的に分かれていた世界が一つの世界となる動きであります。市場経済による世界の世界化、国際金融の世界化といふことであります。問題は、モダナイゼーションがグローバリゼーションをよく実現して行くかということであります。グローバリゼーションは、普遍性への要求をもっております。中国がWTOなど国際機構に加盟することは、グローバリゼーションの必然的要求となるはずであります。日本の役割とは何か。日本国憲法はG7共通の価値観、自由や人権やデモクラシーという価値観の共有を公然と示しており、この憲法のもたらした日本の変化をもって、ネイスビッツの勧告にもかかわらず、G7

の一員であり得る、いや、あるべきであり、そしてモダナイゼーションをグローバルゼーションとして実現すべくみずからさらに努めつつ、アジア諸国の急速な経済発展もグローバルゼーションのコンテクストにおいて推進されるよう協力しなければならぬのであります。

日本国憲法は、国際社会における日本の位置、また、第三ミレニアムに向かう日本の使命を規定しているのであります。堺屋氏のいう多元性とは、多元性が成り立つような新しい世界基盤の形成なしには抽象論に過ぎません。多元性が成り立つ世界基盤の整備が現実的課題であります。それを何によって造るか、それは日本国憲法が受け入れたプロテスタント文化価値、デモクラシーや自由や寛容によって、構築することであります。G7から排除され、他方、アジアには過去の歴史の負い目からうまく入れない、ふたたび世界の孤児になるか、それともこの世界的課題と取り組むかであります。聖学院の課題は新しい日本の課題と同一であります。聖学院はこの課題のために存在しているのであります。プロテスタント大学としての聖学院の約束は、第三ミレニアムにおけるプロテスタンティズムの課題を真剣に自覚することによって預言的性格を獲得し、ヴィジョンをもって新時代、新世界に備えをすることです。

(学校法人聖学院理事長・院長)